

春秋彩

Syunjusai

特集
「防減災と大学の役割」 …… 2

活躍する卒業生 …… 7
国際交流 …… 8
研究活動紹介 …… 10
大学の動き …… 12
後援会便り …… 13
生き生き元気種 …… 14
熊本県立大学未来基金寄付者ご芳名 …… 15
人事情報 …… 15
おすすめの1冊 …… 15



 熊本県立大学

春秋彩とは

万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。

熊本県立大学広報誌

2014 SPRING

vol. 40

あいさつ



学長
古賀 実

東日本大震災の発生から3年目の春を迎えました。大津波により押し流される家々、総ての陸上生物を飲み込んでしまうような勢いで陸地を駆け上がる津波の報道映像は悪夢そのものでした。また、その翌年7月、九州北部集中豪雨により阿蘇地域は大きな被害を被り、熊本市内を流れる白川も堤防決壊寸前でした。日本列島どこでも大規模災害に見舞われる可能性があり、災害に対する日常的備えの必要性を改めて認識したところです。

被災地の復興は多くの課題を抱えながらも、強靱なまちづくりが進められていますが、先の阪神淡路大震災、そして今回の震災を通じ、個人の的確な判断と行動が多くの人々の命運を分ける結果に繋がったことも学びました。

高い堤防や耐震性に優れた建物の建設、食糧・医薬品の備蓄も急務ですが、的確な状況判断と行動力、隣人に手を差しのべることが出来る優しさ、心の備蓄を併せ持つ人材の育成も必要であると考えます。

熊本県立大学では大規模災害を想定し作成した「防災・減災ビジョン」に基づき、学生および地域の皆様の教育・啓発、調査研究、拠点形成をはかっていきます。

防 減 災 と

熊本県立大学
防災・減災ビジョン推進プロジェクトリーダー

副学長 半藤 英明



防減災意識の高まり

東日本大震災とそれに伴う福島県の原因事故は、かつての阪神淡路大震災の記憶を呼び覚まし、今後の首都直下型大地震や南海トラフ大地震の可能性と相俟って、このところ防災関係の論議が活発となっています。最近では国土強靱化の必要性も叫ばれていますが、防災対策の限界を痛感するなかで「減災」の言葉が生まれ、いまや「防減災」が社会全体のキーワードとなっています。大学においても、防減災のための教育、即ち、従来にも見られたような震災後のボランティア活動等とは異なる「事前教育としての防減災教育」を徹底しようとする動きが広く見られます。

防災・減災ビジョンの策定

震災の状況を目の当たりにし、そうでなくとも関連情報に多く接する機会があったこともあり、近年は総じて学生の防減災への意識が高くなっていると感じます。誰もが震災被害者となり得ることは日頃から心構え、知識、訓練等が必要ですが、学生を抱える大学としても、それらに応じた環境整備が不可欠です。そのような観点から、熊本県立大学では平成25年度に教職員合同による「防災・減災推進プロジェクト」を組織して大学全体の防減災のあり方を検討し、今後の指針となる「熊本県立大学防災・減災ビジョン」をまとめ、公表しました。災害が特定の人を選ばないことからすれば、防減災のための計画および諸活動は、学生のためであることは勿論、広く市民を視野とするものでなくてはなりません。大学は、防減災の観点からも地（知）の拠点となり得るし、また、そうなるべきであり、積極的に地域の防減災活動に関わっていくことが必要です。本ビジョンでは、防減災にかかる大学の役割を、「教育・啓発」、「調査研究」、「拠点形成」の3つのアクションに分類整理しています。

防減災と大学の役割

大学における人材養成の目的は、結局のところ、社会に有為な人材の育成であり、大学生に求められる「社会人基礎力」として防減災の基礎的な知識・能力の獲得は理に合うものです。ただ、いざという事態では、身の回りの方々、身近な地域社会との関係が不可欠であるだけに、防減災教育には地域社会を巻き込んだ共同・協同の観点が重要です。地域社会のさまざまな協力を得てこそ、本学の防減災教育および地域への還元が実りあるものになると信じます。

熊本県立大学は、地域の期待と地域への貢献に配慮しつつ、学生に対する防減災教育を強力に推進していきます。

大学の役割

熊本県立大学 防災・減災ビジョン

(平成25年8月策定)

基本的な考え方

熊本県立大学は、防災・減災の取組を地（知）の拠点の実現に向けた事業の一つとして位置づけ、その指針となる本ビジョンを策定し、3つのアクションを展開します。

- 学生のみならず、広く地域住民・職業人等を対象として、防災・減災への志と知識・技能を持つ防災・減災リーダーを育成します。
- 防災・減災に係る調査研究を進め、他の関係機関の取組に参画します。
- 地域の中の防災・減災の拠点となるべく、体制の整備に努めます。

3つのアクション

教育・啓発

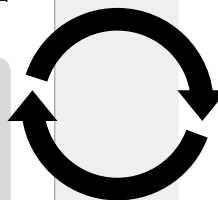
大学の使命として重要な柱である人材育成においては、学生への防災・減災教育を進めます。また、地域防災力向上のため、地域住民・職業人等を対象とした教育・啓発活動も併せて実施します。

熊本県立大学

学生教育

防災・減災

住民・職業人教育



調査研究

防災・減災に関する調査・研究を推進し発信していきます。また、その成果を自治体等、関係機関の防災・減災の取組に参画することで還元し、有機的な連携を図ります。

調査研究
(熊本県立大学)

参画・還元

フィードバック

防災・減災の取組
(関係機関等)

拠点形成

防災・減災に係わる様々な資材等の収集や、緊急時対応マニュアル等、大学としての防災・減災に関するハード面・ソフト面の整備を進め、災害発生時に備えます。

また、災害発生時の緊急対応策として、ボランティア等の人材をスムーズに派遣できる体制整備を行い、自治体や医療機関等との連携を強化して、サポート拠点を作ります。

熊本県立大学

- 防災体制（ハード面・ソフト面）の充実
- ボランティア活動の推進



- 日赤熊本県支部
- 熊本県、熊本市他自治体
- 関係機関等

具体的なプログラム

防災・減災の推進のための3つのアクションについて、自治体や企業・団体等と協働し、具体的なプログラムを実行していきます。

教育・啓発

- 学生の減災意識を高める教育の実施（共通教育、専門教育、実験・実習において）
- 文部科学省大学間連携共同教育事業「減災型地域社会のリーダー養成プログラム」（4大学連携事業）の推進
- 学生に対する課外での救急救命講習等、災害ボランティアに関する情報提供
- 広く地域住民・職業人等に向けたシンポジウム、防災・減災の主体となることが想定される社会人向け教育（CPDプログラム等）の実施

調査研究

- 総合集約型大学としての熊本県立大学のシーズを生かした防災・減災に関する多角的な調査研究の推進
- 調査研究の成果還元として、国や自治体等、関係機関の防災・減災の取組への参画、及びそれらとの連携による成果の教育・調査研究へのフィードバック

拠点形成

- 熊本県立大学の防災体制（ソフト・ハード）の充実
- 人的資源である学生・教職員のボランティア活動体制の整備
- 日赤熊本県支部、熊本県、熊本市等をはじめとした地域との連携体制の充実



自動体外式除細動器（AED）実演講習会



熊本県地域防災支援員養成講座：図上訓練



五百旗頭真理事長 CPD（継続的専門職能開発）プログラム「大震災の時代」

防災・減災教育の推進



総合管理学部 総合管理学科
准教授 澤田 道夫

熊本県立大学では、安全安心な社会の実現のため、防災・減災にかかる教育カリキュラムの提供を積極的に推進しています。様々な学習機会を通して実践的な知識を身につけてもらうことで、学生の皆さんに地域の減災リーダーの役割を果たせる人材となっていたきたいと考えています。

現在行われているこれらの防災・減災教育について紹介します。まずは、本学を含む熊本県内の4つの大学（熊本県立大学、熊本大学（事務局）、熊本学園大学、熊本保健科学大学）が、文部科学省の認定を受けて実施している「減災型地域社会のリーダー養成プログラム」があげられます。本学においては、平成27年度から同プログラムに基づく

4大学共通カリキュラムである「減災リテラシー入門（仮）」を開講することとしています。

また、「減災リテラシー入門の開始と併せて、「防災もやいすと」の講座の開催準備も進められています。本学の地域実学主義に基づく特徴的な取組である「もやいすと育成」に、防災を中心にしたあらたなプログラムを加えることで、学生の皆さんに地域の中で防災を学んでもらう予定です。

既存の授業の中で防災・減災に関する専門家を招聘する取組も始めています。平成25年度には、「新熊本学…地域社会と行政」、「地方自治の基礎」の授業の中で、専門家による講義が行われました。新熊本学では、熊本県知事公室危機管理防災課の堀田さんから県の防災の取組について、陸上自衛隊西部方面隊第8師団の森山師団長から災害時の自衛隊の対応についてのお話がありました。また、地方自治の基礎では、災害救援ボランティア推進委員会の宮崎さんから学生と自治体を結びつける防災の取組についての講義がありました。

更に、学生の皆さんがよく利用する図書館や食堂などのスペースにおいても、防災に関わる様々な書籍やグッズの展示を行っています。平成25年度には、図書館で防災に関する書籍を集め



学生食堂での書籍やグッズ展示



図書館における防災図書企画展示



災害救援ボランティアに関する講話



授業での自衛隊第8師団長講話

た企画展示を実施したところです。今後も、様々な形で防災・減災教育を進めていくこととしています。学生の皆さんも、是非正しい知識を身につけて、地域における減災リーダーを目指してください。

地域防災・減災の取り組み



総合管理学部 総合管理学科
教授 明石 照久

シンポジウム会場での災害時のグッズ展示



日本は、美しい火山、長く入り組んだ風光明媚な海岸線、豊かな水を満々と湛えた静かな湖沼、さらには清らかな水が流れる清流と里山など、世界でも有数の景観資源に恵まれた国です。反面、台風、地震、津波、火山噴火、山腹崩壊などの自然災害の多発地であり、歴史に残っているだけでも、この国が甚大な災害被害を受けてきたことが分かります。

平成7年の阪神淡路大震災、平成23年の東日本大地震、平成24年の熊本県風水害などは、まだ記憶に新しいところですが、この20年ほどの間だけでも、日本国民は大小様々な自然災害を経験してきました。大規模災害が発生したとき、最も頼りになるのは自分自身であり、また家族や地域とのつながりです。大規模災害においては、まさに住民自身の自己責任・自己決定の究極の力が厳しく問われることとなります。阪神淡路大震災や東日本大震災の復旧・復興の取り組みを通して、地域の防災力に大きな関心が寄せられるようになりました。

想像を絶するような大規模災害の場合、行政の力で対処できることは限られているため、住民自身の防災・減災意識の向上、さらには自主防災組織など、いざというときに協働ができる仕組みづくりが何よりも必要となってきました。



シンポジウム事例報告『阪神・淡路大震災を経験して』
NPO法人神戸まちづくり研究所事務局長野崎隆一氏

ます。例えば、阪神淡路大震災の際、神戸市長田区の真野地区は大火を免れましたが、これは「真野まちづくり推進会」という住民組織の長年にわたる地道なまちづくりの取り組みがあったからこそその結果です。

本学では、地域における防災・減災意識の向上と人材育成に向けた取り組みを開始しており、平成25年11月24日には、自衛隊、NPO等の関係者をお招きし、防災・減災シンポジウムを開催しました。今後は、さらに地域における人材の養成に役立つような市民向けの講座を充実させていくとともに、熊本県、熊本市や地元のNPOとの協働の仕組みづくりに役立つような企画を進めていく予定です。

大規模災害への備えは決して一朝一夕ではできません。神戸市の真野地区



シンポジウム事例報告『南海トラフ巨大地震への備え』
陸上自衛隊九州補給処長の川崎朗陸将補

の取り組みも実は30年以上の積み重ねがあります。防災・減災を本学の行う地域貢献の重要なテーマの一つとして、今後、様々な形で取り組んでまいりますので、県民の皆様のご理解とご協力をお願いしたいと存じます。



シンポジウムパネルディスカッション

防災・減災に生かす 食の実践



熊本県立大学食育推進プロジェクト
特任准教授 渡邊 純子



意外に美味しい防災・減災メニュー

本学では「熊本県立大学 食育・健康ビジョン」に基づき「食育の拠点形成」の一環として学食を活用した「食育の日」を実施しています。環境共生学部食健康科学科の学生を主体に包括協定先や関係機関と連携し、熊本の食資源を生かしたオリジナルメニューの開発や食育・健康に関する情報提供などを行っています。

今年度策定の「防災・減災ビジョン」のアクションプランにも、「教育・啓発」の具体的取組として、上記「食育の日」における防災食の情報提供が掲げられています。

そこで、平成26年1月の「食育の日」は、防災・減災プロジェクトと連携して取り組みました。「体験！防災・減災食 あなたにできること」と題し、備蓄食品や被災時の非常食について、体験調理・試食をとりいれて実施したところ、「非常食って思った以上においしい」「もしもの時に備えて備蓄しようかな」といった前向きな意見や「容器が使いづらい」「お湯がない場合はどうするか」など、示唆に富む意見を数多くいただきました。

非常時に不足しがちな栄養素は主にタンパク質・ビタミンB₁・ビタミンC・カルシウムであるため、非常食は単品より組み合わせると栄養バランスもよくなります。写真のアレンジメニューは日常でも手軽に取り入れることができます。また買い物の際、災害時の食事をイメージして準備することにより、食材選びの工夫や知識が自然と身につきます。

ところで、災害発生後の長期にわたる避難生活では、高血圧、糖尿病、低栄養、生活習慣に関わる疾患が増加することが報告されています。そのため最近では、被災後の時間経過や対象特性ごとに予め「パッケージ化された防災・減災食（健康悪化による二次被害を減らすため栄養管理された組み合わせ）」の速やかな供給体制の整備や、定期的な「防災・減災食訓練」などの取組も広がっています。

下の図は、内閣府発行の「食育ガイド」に示してある個人向け備蓄品の例です。1か月分とまでいなくても、「まずは3日分」

いざという時のために、3日分程度の食品、飲料水の備えをしましょう

家族の人数や構成に応じて、避難袋に入れる持ち出し用、長期にわたる災害の対応のために家に備蓄するものに分けて用意しておきましょう。



栄養プラス！簡単アレンジ！ トマト缶・さけフレーク・乾パンで栄養アップ！普段から食べる訓練を！



から実践してみませんか。

普段から、簡便で健康的な食事について知識や関心を持ち実践することは、被災時の食の自己管理に役立つとともに、教養として自分の食事を構築する力を養うことにもつながります。

今後も関係機関と連携して防災・減災食体験の機会を提供することは重要であると考えます。

参考資料

- ・「食育ガイド」(A guide to "Shokuiku") 内閣府政策統括官付食育推進室
- ・「災害時の栄養・食生活支援マニュアル」国立健康・栄養研究所、日本栄養士会、2013

- ・「健康危機管理時の栄養・食生活支援メイキングガイドライン」(財)日本公衆衛生協会、2010
- ・「災害時の食に備える」(冊子)新潟県柏崎市地域振興局健康福祉部、2013
- ・「防災女子会」神戸発防災・減災プログラム事業、2013

さまざまな分野で活躍する熊本県立大学の卒業生を訪ね、
現在のお仕事や、ご自身の学生時代について、語っていただきます。



富山高等専門学校 助教

小川典子さん

プロフィール

熊本県立大学英語英米文学科 2006 年卒業。
京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了、博士課程研究指導認定退学の後、
2011 年より京都ノートルダム女子大学、
龍谷大学に非常勤講師として勤務。2013
年に博士の学位を取得。2014 年 4 月より
現職。

現在の仕事（これまでのこととこれからのことを少し）

私は「言語学」という、誰にとっても身近で、しかし欠くことのできない「言葉」の研究をしています。「言語学」という分野を意識したのは高校生の頃で、「言語学を学びたい」という思いを胸に熊本県立大学に入学しました。実際に学んでいく中で、「言葉と、それを使う人間のことをもっと知りたい」という思いが強くなり、研究者を目指して京都大学大学院へ進学しました。

私が入学した京都大学大学院人間・環境学研究科は、文学から脳科学までを含む、非常に学際的な研究科です。そのような研究科で、様々な分野への視野を拡げながら、修士課程、博士課程の5年間を過ごしました。研究の進め方、議論の仕方、論文の書き方、学会発表の仕方等、研究生活を送る上で必要なあらゆることを学んだ、密度の濃い5年間でした。

その後の3年間は、複数の大学で非常勤講師として英語を教える傍ら博士論文を執筆し、2013年に博士号を取得しました。授業と並行しての博士論文執筆は、体力的にも精神的にもとても辛いものでしたが、今後の研究生活への大きな自信になったと思います。

4月から勤務する富山高専でも、研究を行う傍ら英語を教えることとなります。私が専門とする「認知言語学」の考え方も繋がりますが、言葉を学ぶというのは、言葉そのものだけでなく、それを使う人間がどのように物事を見ているか、どのようなコミュニケーション様式を採っているか、そして文化をも併せて学

ぶことを意味します。外国語教育を通して、ひいては母語を見つめ直す機会も提供していければと思っています。

学生時代に得たこと

大学生・大学院生として過ごした中で得た「人との繋がり」が、一番の財産です。熊本県立大学では少人数での授業やゼミが多く、先生方に「多くの学生の中の一人」ではなく、「一人の人間」として真摯に接していただいたことが強く印象に残っています。京都大学大学院では、先輩・後輩との繋がりが非常に強い研究室に在籍していたということもあり、切磋琢磨し合える多くの仲間に恵まれました。この「人との繋がり」にどれほど助けられたかわかりません。

在学生、受験希望者へのメッセージ

大学生は、高校生に比べて自由度が増え、経験にも幅が出てくる時期だと思います。この時期に、ぜひ同年代だけでなく、様々な年代の人に出会い、世の中に多様なものの見方があることを実感してください（外国語学習も異なるものの見方を学ぶ一つの手段です）。そして失敗を恐れず、様々な経験を積んでいく中で、責任を持った大人としての一歩を踏み出してください。

活躍する卒業生



在外研究報告 ニューヨークで演劇を研究する

文学部英語英米文学科 准教授

坂井 隆

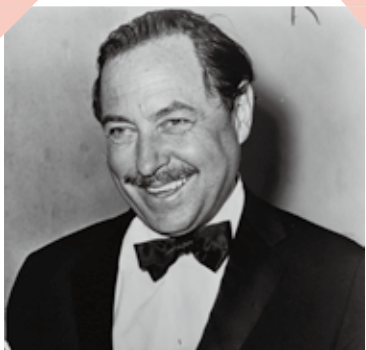


熊本県立大学の在外研究プログラムを利用し、2012年9月から翌年の9月にかけてThe City University of New YorkのThe Graduate Center付属のThe Martin E. Segal Theatre Center (MESTC) に客員研究員として所属しました。同センターは、アカデミアと、パフォーマンス・アーツの実践の現場との橋渡しとなることを使命とし、毎年、各国から多くの学者や演劇の実践家を招き、研究・活動の場を提供しています。私が留学した期間を例にしても客員研究員の国籍は、ドイツ、イギリス、ブラジル、エジプト、中国、日本など多様で、研究分野も戯曲のテキスト分析から上演分析、翻訳、演技など多岐にわたります。



City University of New York の Graduate Center

MESTCの特徴のひとつは、研究者だけでなく、一般にも開かれたセミナーをほぼ毎週、開催している点です。2012年10月に参加したセミナー The Ecstatic Soul: German Expressionist Dance が特に興味深かったです。20世紀前半、ドイツ表現主義の影響を受けた(とされる)女性ダンサーについての講義からはじまり、そこで紹介されたダンスのいくつかが会場で実演されました。当時、ダンス経験のない女性に催眠術師が催眠をかけて踊らせるというダンスショーがあったらしく、そのダンスも Hypnotic Induction-Dance というタイトルで披露されました。会場では、プロの女性ダンサーが、催眠術師の暗示にかけられたままで、踊りを披露しました。本当に催眠下でダンスしているのか、少々、疑問でしたが、当時のドイツの観客も疑念と好奇心の両方をもちながら、楽しんだのだと思います。



テネシー・ウィリアムズ (1911-1983)

MESTCでの、私の当初の研究テーマは、「Tennessee Williams (1911-1983) と現代アメリカのクィア演劇」でした。アメリカを代表する劇作家Williamsの演劇観とジェンダー／セクシュアリティ観との関係を検証し、それらの現代性を明らかにしたいと思っていました。しかし、センターでリサーチを進めていく中で、今まで無視されてきた、彼の後期の演劇に興味を持ち始めました。それらの演劇作品は劇評家によって「失敗作」と酷評されてきたのですが、その失敗にこそ芸術的創造性があるのではないかと思います。始めるようになりました。幸運なことに2013年の3月にセンターで開かれた研究報告会においてその仮説について研究発表をする機会を得ました。他の研究員の方々やアドバイザーであったAnnette Saddik教授から有益なコメントを戴きました。帰国後は、それらのコメントを参考にした上で仮説を論証するためのリサーチを進めています。早いうちに論文としてまとめ、ジャーナルに投稿したいと考えています。

やりたい事をやることが出来た一年間

文学部日本語日本文学科 特別聴講生

金 芸藍 (キム イエラム)

熊本に来てから約一年という時間が経ちました。ここでの生活にも大分慣れてきたと思います。私にとっての2013年はどうだったのか、何か変わったことや悟ったことはあったのか、そういったことを考えつつ、私の一年間の留学生生活をゆっくり振り返ってみました。

私は日本に来る前、熊本県立大学で何をしたいのかについて記す「学業計画書」というものを作成しました。そこに書き込んだのは、「日本文学の勉強がしたい」と「交流したい」の二つでした。祥明大で学んだ日本文学に興味を持ち、県立大でも文学の授業を受けたいということと、他国の人と交流でその国の文化に接し、彼らにも韓国の文化を楽しんでもらいたいということでした。

今考えてみれば、それらは全部叶ったと思います。なぜなら、一年間の生活で一番印象的だったことが全部、人との交流に関わっているからです。同時に自分にとっても一番楽しく、満たされたところでもありました。交流の場は県立大に限っていたので、人から見ると「交流」と言うには少し物足りないかも知れませんが、だからこそ、更に深い絆で結ばれることができたと思います。そして勉強においても、自分の立てた目標にちゃんとたどり着くことができました。

交流で得たものは思ったより多かったです。それは、一緒にいると楽しい友達が出来たのはもちろん、直接経験してみないと中々その感覚が分からない文化、そして自分自身の成長です。絆をつくる楽しさを満喫したとも言えるでしょう。「友達」とは研究室の人のことでもありますが、前期と後期に担当した韓国語講座を受けてくれた方でもあり、日文以外の学科の人でもあり、様々な国籍の人でもあります。一緒に祭りに行ったり、街を歩き回ったり、家に誘って韓国料理を食べたり、神社で一緒に新年を迎えたりするなど、楽しい時間を過ごしました。そんな中、一番強く感じたのはやはり文化の違いからくる楽しさだったと思います。そしてそれらを自分なりに受け入れようと頑張った自分も、少しは成長したような気がします。



祥明大から交換留学生(筆者は中央)



留学生ウェルカムパーティーにて



日本語教育研究室のみなさんと

何よりも、日本語での会話に常にプレッシャーを感じていた私が、人の話をたくさん聞いて、それに対する自分の思いをたくさん伝えようとしたことで、そのプレッシャーを少しずつ減らしていくようになったことが嬉しかったです。県立大で勉強している間も、自然な日本語に慣れることができました。前期が始まって間もない頃は先生の説明を理解するのに精一杯でしたが、少しずつ理解できるようになりました。そのおかげで、受けたいと思っていた文学の授業も楽しく受けることができました。慣れなかったことに慣れていくというのは本当に素晴らしいな、と感心したわけです。

一年という時間があっという間に終わってしまったようで少し寂しい気持ちもありますが、自分のやりたいことをやることができたという、とても満たされた一年だったとも思えます。次の交換留学生のみなさんにも、県立大の学生のみなさんにも、ぜひこの楽しさを味わいながら、それぞれのやりたいことをやって欲しいと思います。

総合管理学部と行政学

—行政学研究を志して—



総合管理学部 総合管理学科
講師 川瀬 美穂

Profile:

熊本県立大学総合管理学部を卒業、
同大学院アドミニストレーション研究科博士後期課程修了（2010年3月）。
博士（アドミニストレーション）。
久留米大学法学部非常勤講師などを経て、2013年4月より現職。



はじめに

私の専門分野は「行政学」という研究領域です。行政学といっても一般的には馴染みの薄い分野であるかもしれません。政治学や行政法と混同される方も多々のように思います。私たちの日常生活は、中央政府や地方政府が提供している政府政策や行政サービスと密接な関係にあります。それらの企画立案や実施を担う行政組織の活動を研究対象としているのが行政学という分野です。すなわち「公務員による公的で組織的な活動について研究する学問」ということになります。ここでは、私が現在の研究テーマに辿りつくまでの経緯と研究内容を中心に紹介させていただきます。

行政学との出会い

現在、私は「公務員による公的で組織的な活動」を「責任」や「倫理」という観点から研究しています。まずは、私がこのような研究を着手するに至るまでの経緯についてお話ししたいと思います。

本学で開講されている「パブリック・アドミニストレーション」という科目をご存じでしょうか。総合管理学部において2年次に履修する科目です。行政の役割や機能について制度・管理・政策といった側面から学ぶことができます。本学には「パブリック・アドミニストレーション」以外にも、多くの行政関連の科目があります。大学院のプロフェッショナル教育としてではなく、学部の科目としてそれらを履修することができるという点は本学ならではの特徴

であるように思います。在学中、この「パブリック・アドミニストレーション」という科目を受講し、初めて「行政学」という学問の存在を知りました。当時、私は公務員集団の行動様式をより実態的に説明しようとする行政学の魅力に惹きつけられ、いつしか行政学研究者を志すようになりました。

行政学のなかには様々な関心テーマが存在しています。私が特に行政責任や行政倫理という分野に関心を抱くようになった理由は、学部3年生の時に指導教員の先生から紹介していただいた文献「Ethics in Public Administration」との出会いにあります。哲学的な観点から行政倫理へアプローチするこの文献を卒業研究の主要参考図書としてとりあげたことが直接的な契機となり、現在も倫理に関する研究を続けています。

このように、現在、私が行政学研究者として人生を歩んでいるのも熊本県立大学総合管理学部に入学し、そこで恩師をはじめ、様々な科目や図書と出会うことができたからであると感じています。



大学時代に出会った文献。

Ethics in Public Administration
A PHILOSOPHICAL APPROACH
Patric J. Sheeran

責任・倫理論からのアプローチ —研究の内容—

そもそも学界において行政における倫理の重要性が注目されるようになったのは「行政国家化」、すなわち行政の本質的役割の変化にあるといわれています。つまり、政治的決定に従いながら、その執行を本来的役割とする行政組織が決定機能に重大な影響を与えるようになったことで、行政の意思や行動をより倫理的なものへと導くための枠組みや手法に関する研究が行われるようになりました。

現在、私は政府と国民が信頼関係を維持し、公正な行政運営を確保するための手法やその妥当性に関心を寄せています。そのため、以下のようなテーマで研究を行っています。

①行政倫理システムの機能および逆機能

近年、公務員の倫理保持や政府および国民の間における信頼確保という目的の下、公務員倫理法や倫理条例が制定されています。その他、倫理研修等も実施されています。このような取組みが公務員の倫理保持や職務意欲にどのような影響を与えているのか、行政倫理システムの機能的側面および逆機能的側面に注目し、これらが公正な行政運営を確保するための手段になり得るかどうかについて検討しています。

②政策過程における民主的統制と責任

現在、行政を適正に統制し、責任を確保するための制度として、政策評価制度や行政手続制度、情報公開制度、オンブズマン制度などの各種制度が中央および地方政府において運用されています。これらの制度が政策過程においてどのように機能しているのかを検討し、公共政策を民主的にコントロールし、適切に責任を確保するための実行可能性について考察しています。



サブゼミの風景（研究室にて）

行政学研究室—ゼミ活動—

本研究室では、平成 25 年度は「組織における分業および調整」をテーマに、行政組織における分業や調整に関して、その目的や方法等について考察しました。

平成 26 年度は「公共政策」に焦点をあて、政策に関する基本的知識や技法の習得を目指した活動を行っていく予定です。

公務員を志望する学生が多いことから、将来に役立つような行政の組織や人事、政策、制度に関する知識等を教授していきたいと考えています。また、彼らが、行政学を通して、地域や行政、政治等に対する関心を高め、地域社会に貢献できる人材になるための手助けができればと願っています。

休日の過ごし方—趣味の話—

数年前から月に一回程度、山登りをしています（ロープを使用したりするような本格的なものではありません）。九州の山々を中心に登っています。頂上に到達した時の“爽快感”、草花の美しさ、仲間との語り…山登りには沢山の魅力があります。昨年の夏には日本第二の高峰である北岳登山に挑戦しました。



山登りのメンバーと一緒に（市房山頂上にて）

大学の動き

「水の国くまもと」ビデオコンテスト最優秀賞受賞

津曲研究室の有志6人で TKU「水の国くまもと」ビデオコンテストに応募した作品が最優秀賞を受賞しました。これは、熊本の水の素晴らしさを30秒映像で表現するものです。

決定打となるアイデアが出てこず苦しみましたが、津曲教授のちょっとしたアドバイスをきっかけに、アイデアが弾け、水の清らかさや透明度を“音”にこだわって表現する発想に辿り着きました。それからは、“奏（かな）でたい水”を具体化するための実験と撮影の繰り返し。一番大変だったのは暑さです。編集に入った頃、落雷で大学の空気が壊れ、連日35℃を超える灼熱の研究室でアイス片手に締切りに間に合わせるべく必死の編集作業でした。それもあり、最優秀賞の知らせにみんなで飛び上がって喜びました。

審査委員長の小山薫堂さんからは、最もこだわった音とキャッチコピーとを高く評価して頂き、灼熱の暑さは良い思い出に変わりました。



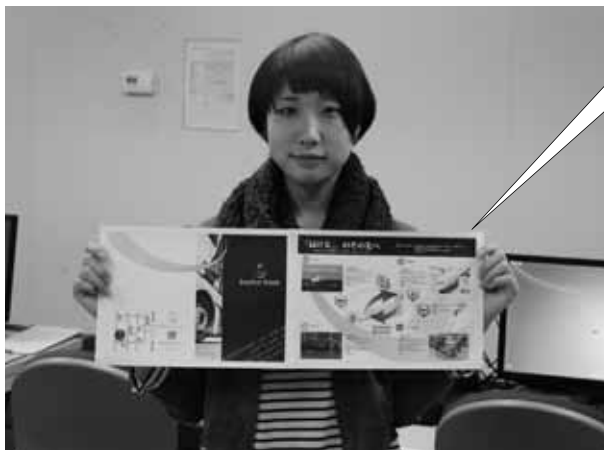
【受賞作品】「奏（かなで）」

総合管理学部 総合管理学科	4年	石原 知佳 (リーダー)
		吉村 裕子
	3年	藤本 直也
	2年	尾堂 哲
		田中 ゆか
		坂本 美月

紹介サイト

http://www.tku.co.jp/tku2012/videocontest2_kekka

本学学生がデザインコンペ銀賞受賞



総合管理学部3年生の新保有紗さんが、デザインコンペで銀賞を獲得しました。このデザインコンペは、仙台のデザイン企業が企画したもので、全国のデザインや美術を学ぶ多くの学生が作品を応募しました。受賞作品は、流通・小売りをテーマとしたパンフレットのデザインで、デザインスキルはもちろん、相手に何を伝えたいのか、社会の動きをどのようにデザインに反映させるのかなど、社会学系学部生としての視点での作品作りを評価された受賞は快挙です。

紹介サイト

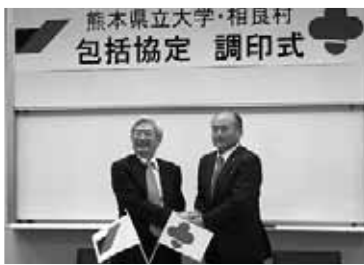
<http://www.compebu.jp/introduction/list-a/>



相良村、高森町と包括協定を締結しました

本学は、昨年10月22日に相良村と、今年2月4日に高森町と、それぞれ様々な分野での相互協力を目的とする包括協定を締結しました。本学との包括協定団体はこれで18団体となります。

この協定により、本学の教育研究活動のフィールド拡大と、本学が有する知的資源を活かした地域づくりや観光振興などが期待され、今年1月29日には相良村の特産品のやまと芋等を使った「食育の日」も開催しました。



CPDプログラム「自治体職員向けファシリテーション講座」を開講しました

平成26年1月17日から5回にわたり、熊本県立大学CPD「学び直し、学び直し」プログラム「自治体職員向けファシリテーション講座」を本学のCPDセンターにて開講しました。

講座には、市町村職員など約40名が参加し、会議やワークショップ等を効率的に進めるためのファシリテーションやコミュニケーション、職場における課題解決のスキル等をグループワークや事例演習を通し、楽しみながら学びました。



後援会便り



海外ボランティアにて授業を行った子ども達と

後援会では国際交流推進事業として海外留学・研修等にかかる渡航費の一部を助成しています。海外協定校への留学・研修・学術交流の他にも、ゼミ団体の海外研修や私費での留学、海外ボランティアへの参加（写真）など、毎年多くの学生が利用しています。現地学生や住民の方との交流や異文化に触れたり、自分を見つめ直すきっかけになったりなど貴重な経験ができる学びの機会には是非チャレンジして欲しいと思います。

後援会とは

- 本学学生の保護者またはこれに準ずる方を会員として組織されています。
- 大学の教育事業を後援し、大学と家庭及び社会との協力によって、大学教育の成果をあげることを目的としています。

後援会の事業 次の4つの事業を中心に学生の活動全般を支援しています。

《就職対策事業》

- 就職対策講座(公務員試験対策講座、ITサポート試験対策講座、二級建築士受験対策講座、秘書技能検定対策講座等)受講料の一部助成または開催経費の一部助成
- PROGテスト(社会人基礎力の測定)開催経費の一部助成、TOEIC®IPテスト開催の支援及び受講料の一部助成、各学部による就職支援事業開催経費の一部助成、資格取得者への助成 等

《教育研究助成事業》

- 学生共同自主研究への助成
- 国内学生大会等出場経費の一部助成 等

※新入生へは、本学合格通知の際に、後援会の説明及び入会・会費納入のお願いをしております。まだ未加入の方は、充実した学生生活を送るためにも後援会事業をご理解いただき、是非ご加入ください。途中年次であっても随時入会を受け付けています。

《国際交流推進事業》

- 海外留学・研修期間に応じて渡航経費等の一部助成
- 留学対策講座の受講料の一部助成
- 英語合宿開催経費の助成 等

《学生活動支援事業》

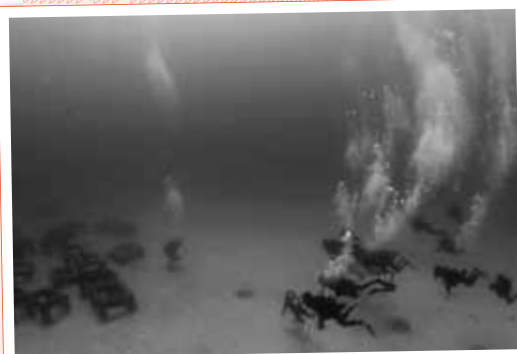
- 各サークルの活動費・白亜祭開催経費・全国大会出場経費等の一部助成
- 学生用コピー機の設置、コピーカード販売
- 学生のリクエストに応じ図書を購入し図書館へ配置 等

活き活き 元気種!!

このコーナーでは、サークル活動をはじめ、地域で活躍する熊本県立大生の声をお届けします。

ダイビング部活動報告

総合管理学部 総合管理学科 3年
ダイビング部主将 猿渡 智恵



活動写真（鹿児島県喜界島）



フリッパー競技大会での集合写真



フリッパー競技の様子

私たち熊本県立大学体育委員会ダイビング部は熊本大学体育会ダイビング部と合同で、天草を中心に鹿児島や沖縄の海で潜っています。監督兼インストラクターである坂田礼司氏の指導の下、安全潜水をモットーに世界中の海で潜れる自立したダイバーを念頭に活動しています。各大学のOB・OGやプロダイバーの方々との交流も多く、経験豊富な先輩方からはスキル以外の面でもご指導して頂いています。

海での活動だけでなく、日頃お世話になっている方々への恩返しとしてボランティア活動もしています。毎年5月に下田温泉で有名な天草の下田で開催される「下田温泉祭」にボランティアスタッフとして参加しています。同祭の「お湯かけ女神輿」の担ぎ手や、子供や女性が参加する「ブリ掴み大会」の会場の生簀作りやブリの放流など、ダイビング部だからこそ出来るお手伝いをさせて頂いています。他にも地元のダイビングショップと協力して、年に一回天草の海底清掃を行っています。今後は自主的に海底清掃等の環境保全活動を行っていきたくです。

秋にはフリッパー競技大会という大会があります。より安全なダイビングを行うために潜水技術の向上を目的とし

たもので、足ヒレやシュノーケル、マスクといったダイビング器材を用いてフィンスイミングや潜泳の速さを競います。昨年も10月に中央大学にて「第46回関東学生潜水連盟フリッパー競技大会」が開催されました。本学と熊本大学からも選抜メンバーが参加し、女子総合優勝・男子総合優勝・総合優勝の今年で四連覇を成し遂げました。

また昨年は熊本で「第33回全国豊かな海づくり大会」が開催され、私達も県民百貨店の特設コーナーにて水中写真展を行いました。熊本の水をテーマにした水中写真の他、地下水を利用した水循環のパネルや動画を作成し展示しました。県内外から来られた多くのお客様に水中写真を通して熊本の豊かな水源、豊穡の海・天草の魅力を感じていただきました。

このようにダイビング部は海での活動以外にもボランティアや、多くの方に熊本・日本の海の魅力を知って頂く写真展にも力を入れています。今年で部が発足して27年目となりますが、これまでと同様に無事故・安全潜水を徹底し、ダイビング部だからこそ出来る地域貢献を行っていきたくと思います。



下田温泉祭・ブリの放流



夏合宿での集合写真（鹿児島県喜界島）

熊本県立大学未来基金へのご協力に、心よりお礼申し上げます。

熊本県立大学未来基金につきましては、平成25年8月1日から2月28日までの間に、下記のとおり、延べ個人7名、3法人・団体等の皆様から総額17,205,000円のご寄附をいただき、これにより平成21年9月8日設立以来の基金総額は、102,987,255(申し出分を含む)となりました。昨年度までに、奨学金は、CPDセンターの整備や熊本県立大学奨学金、創立65周年記念国際シンポジウム等に活用させていただいております。ご寄附をいただきました皆様に厚く感謝し、ここにご芳名を掲載させていただきます。

①ご寄附してくださった方

(寄附金額別、五十音順、敬称略にて掲載させていただきます。)

【個人】 1,000万円 浅野 敦子
3万円 緒方 博子

②お名前のみ掲載を希望された方

(五十音順、敬称略にて掲載させていただきます。)
※○内の数字は、累積寄附回数です。

【個人】 黒木 誉之④

※お名前の掲載を希望されないご寄附者は
個人4名、法人・団体等1団体でした。

●人事情報

採用 (平成25年10月1日付)

総合管理学部

総合管理学科 パブリック・アドミニストレーションコース 講師 佐藤雄一郎

採用 (平成26年4月1日付)

文学部

日本語日本文学科 講師 小川 晋史
日本語日本文学科 講師 崔 文姫
英語英米文学科 准教授 飯村 英樹

環境共生学部

居住環境学科 准教授 高橋 浩伸

総合管理学部

総合管理学科 地域・福祉ネットワークコース 准教授 白水 麻子

退職 (平成26年3月31日付)

環境共生学部

居住環境学科 教授 村上 良知

総合管理学部

総合管理学科 情報管理コース 教授 松野 了二

就任 (平成26年4月1日付)

《学 長》 古賀 実 (再任)

《副学長》 津曲 隆

[学部長]

文学部長 砂野 幸稔

環境共生学部長 堤 裕昭 (再任)

総合管理学部長 黄 在南

[大学院研究科長]

文学研究科長 鈴木 元

環境共生学研究科長 福島 英生

アドミニストレーション研究科長 荒木紀代子

[センター長]

地域連携・研究推進センター長 (環境共生学部 教授) 松添 直隆 (再任)

学術情報メディアセンター長 (文学部 教授) 半藤 英明

キャリアセンター長 (環境共生学部 教授) 松本 直幸

保健センター長 (環境共生学部 教授) 福島 英生 (再任)

[学科長・コース長]

文学部

日本語日本文学科長 馬場 良二

英語英米文学科長 村尾 治彦

環境共生学部

環境資源学科長 張 代洲 (再任)

居住環境学科長 李 祥嘉 (再任)

食健康科学科長 白土 英樹

総合管理学部

総合管理学科 パブリック・アドミニストレーションコース長 小泉 和重

総合管理学科 ビジネス・アドミニストレーションコース長 丸山 泰

総合管理学科 情報管理コース長 宮園 博光 (再任)

総合管理学科 地域・福祉ネットワークコース長 石橋 敏郎

昇任 (平成26年4月1日付)

文学部 教授 米谷 隆史 / 准教授 木村 洋

環境共生学部 教授 松本 直幸 / 准教授 一宮 陸雄

総合管理学部 准教授 山西 佑季

おすすめの 一冊



福田昇八著
岩波ジュニア新書
二〇一四年一月刊

「英詩のこころ」

①だれかさんとだれかさんが
むぎばたけ
キスぐらいされたからって
なんで泣くの

②わたしが死んだらねえあなた
悲しい歌はいらないわ
墓には薔薇も糸杉も
植えなくてもいいことよ
お墓の芝は雨露で
湿ってれば十分よ
よければわたし思いだし
よければわたし忘れてね

①はスコットランドの、②はイギリスの詩の
始まりの一節です。声に出して読んでみると、
七・五のリズムに乗って、いい感じ。定型詩で
ある英詩を、日本語の定形詩に訳していて、読
み上げるといい気持ち。原詩もできるだけ掲載
されていて、長短 36 篇の英詩を日本語と英語
で興味深く味わえます。各詩の内容や構成をわ
かりやすく解説しているの、英詩への格好の
入門書といえるでしょう。

さて、いつでも口ずさんで楽しめる詩を讀ん
で、あなたは、どの詩が好きになるでしょう。

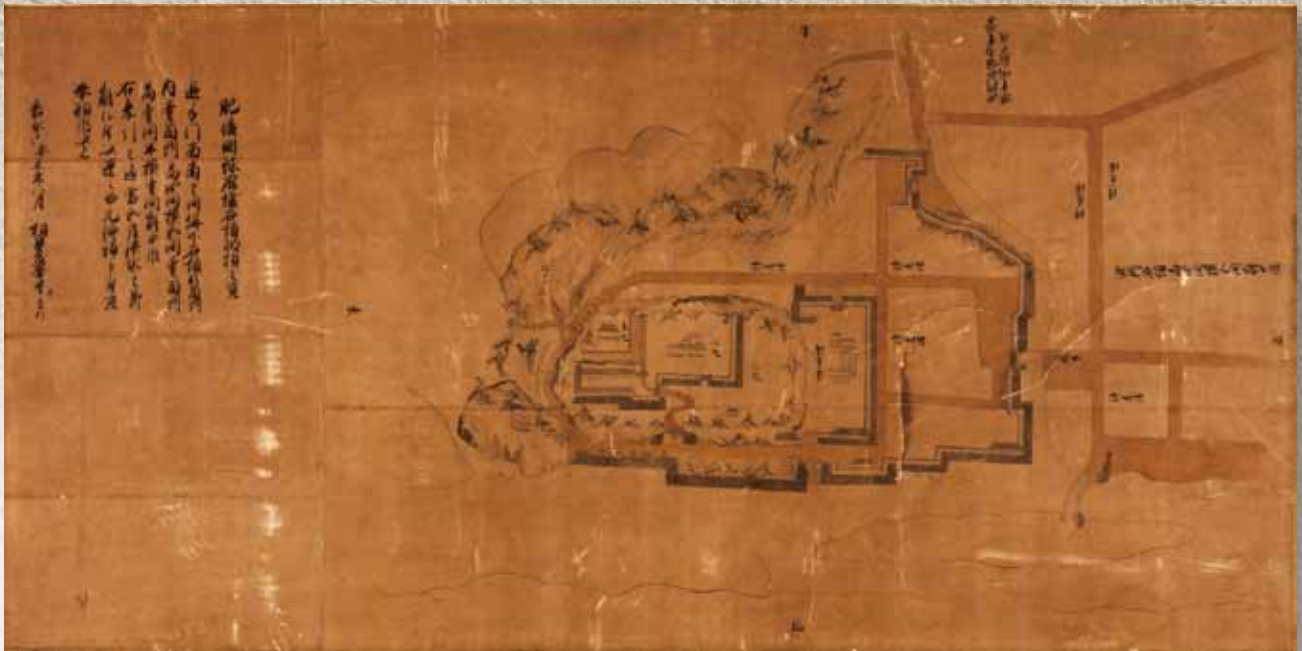


文学部英米文学科
教授 村里 好俊



熊本県立大学 アーカイブズ

Archives of Prefectural University of Kumamoto



「球磨城普請伺控図」

絵図は南を上方とし、左方に文章、右方に球磨城を配置する構図で描かれている。城の構造や、城が球磨川と胸(棟)川に囲まれていることなどから、「球磨城」は「人吉城」と同定できる。また、当時の他文書にもこの表現は確認できる。

内容は、嘉永六年(一八五三)五月の洪水によって破損した追(大)手門近くの石垣二箇所(絵図右上方にかすかに見える朱引部分)の修理伺いである。差出は第三十四代相良家当主長福。宛先は当時普請を管轄していた江戸幕府の老中。なお、本史料中には、長福の書判や押印は確認できず、ただ文字で「書判」「印」と記されていることは、この絵図が老中に提出した原本ではなく、控図であることを示している。

本絵図は、相良長福の未知の実績を明らかにするにとどまらず、従来認識されてこなかった、嘉永年間に起きた球磨川の洪水史を証言する現時点で唯一の史料でもある。

解説

文学部 日本語日本文学科 准教授

大島 明秀

文学部 日本語日本文学科

池田佳奈美

文学部 日本語日本文学科

鷺崎 有紀

「春秋彩」へのご意見・ご感想をお待ちしています。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
いただいたご意見は、今後の広報誌編集の参考にさせていただきます。
〒862-8502 (住所記載不要)
熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行
FAX 096-384-6765 E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行:熊本県立大学

〒862-8502 熊本市東区月出3丁目1番100号
TEL 096(383)2929(代)
<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/>

再生紙を使用しています

